

生涯学習における子どもと大人との参画学習について

五十嵐 牧子

(文教大学教育研究所客員研究員)

【要旨】

子どもと大人との様々なコミュニケーションの在り様には、いくつか考えられるが、中でも、子どもと大人がそれぞれ同じ立場で、対等な意識で付き合いながら、一緒に活動していくことは、今後の教育環境をよりよいものへと導く要素を持っている。本稿は、このような「子どもと大人との参画学習」について、子どもの参画の理論や生涯学習の理念、そして「環境問題」を中心とした学習活動の実践事例を通して、考察したものである。子どもと大人とが様々な体験・経験を共有すること、あるいは、多様ななかかわり方を経験していくことが重要であり、その過程において、個々人の主体性・自主性が生まれてくると考えられる。今後の生涯学習社会において、教育者から学習者へ知識を伝達するというだけの教育観を、相互の学び合いによる双方向的な教育観へと移行させていくことが課題となるだろう。

1. 問題の所在と研究の目的

(1) 子どもと大人のかかわり

子どもたちをめぐる現代の社会状況が危惧される一側面として、人間関係が希薄化していることがあげられる。この人間関係の希薄化は、個人の自己存在感や自己肯定感の欠如へつながると考えられる。⁽¹⁾ このような状況は、現在、問題視される様々な教育問題の一要因として、共通して根底にあるものの一つと言えるだろう。従って、子どもたちは自己の存在感や肯定感を持てる環境を必要としていると言えるのであり、その重要性を改めて認識しなければならない。

現代社会は、文化的に子どもと大人の境界が曖昧になり、「子ども期の喪失」などとも言われている。⁽²⁾ また、価値観の多様化や情報化の進展、地域社会の変容など、社会状況の変化も著しい。そのような状況の中で、様々な場において、あるいは活動の中において、子どもと大人がお互いに様々ななかかわり方を経験しながらコミュニケーションをし、子どもたちの個性や存在を認めていくことが、子どもも大人もお互いに自己存在感・肯定感を持つことにつながると考えられる。子どもと大人の様々ななかかわりの在り様については、おおよそ以下の4つの在り様を考えている。⁽³⁾

①〈居場所の提供〉

大人が子どもに、彼らが安心して居られる場所を提供することである。この関係においては、大人は子どもの世界を大切にし、そこに立ち入らず、「子どもだけの世界」を確保してあげようとする姿勢で接することとなる。同世代の子どもたちとの様々ななかかわ

りから、子どもたちは成長の糧の多くを得るものである。あるいは、子どもの一人遊びから、自分自身とのかかわりを見つけていくこともある。

②〈知的好奇心の刺激〉

大人が子どもに積極的に働きかけ、世の中の様々な出来事や事象を大人が子どもに伝え、子どもが新たな活動に入るきっかけを与えることである。これによって、子どもは自分自身の世界を広げていくことができる。例えば、学校の主な営みは、これに入ると考えられる。

③〈子ども活動のサポート〉

子どもが自分から何かをしようとした時に、子どもの意思や個性や考え方を最大限に尊重しながら、それに応えるものである。②のかかわり方と違う点は、子どもが自分から何らかの活動を行っていくことである。それに大人が応え、サポートしていくことによって、子どもたちは自分の世界をさらに広げていくことができる。

④〈子どもと大人の共同活動〉

子どもも大人も、それぞれが同じ立場でその活動の主体者となっている。そのプロセスにおいて、子どもと大人がお互いに対等な意識で付き合いながら、一緒に活動することである。ここでは、世代間の差を越えて、お互いに一人の人間同士として、その人間性や個性を認め合うことが特に重要となる。

以上の4点は、一人の子どもにとってそれがバランスよく経験される必要があるだろう。しかし、現代の学校を中心とした子どもたちの生活には、特に④のかかわり方が少ないと思われる。従って、④の在り様を増やし、そのバランスを取っていく必要がある。

(2) 生涯学習への視点

生涯教育・生涯学習の理念は、「大人から子どもへ単に知識を伝える」といった教育観を、個々人の主体的な学習や活動を重視する教育観へと転換し得る考え方である。また、そのプロセスにおいて、他者との相互のかかわりやコミュニケーションを、人が社会性を身につけていく上での基礎として重視している。⁽⁴⁾ この点から、前述の4つのかかわりの在り様の④のあり方を増やし、かかわりのバランスをとっていく際に、その基本的な理念として、位置づけることができるだろう。

本稿では、それを実現していく方法の一つとして「子どもと大人との参画学習」を考察する。本稿では、前述の子どもと大人の様々なかかわり方のうち、④を主としたかかわりの活動や学習を「子どもと大人との参画学習」と呼んでいる。このような子どもと大人との参画学習が、現在の社会状況の中で、今後の教育環境と生涯学習社会に、的確な方向性を示すものであることを明らかにしていきたい。

以下では、子どもの参画の理論や生涯学習の理念を通して、「子どもと大人との参画学習」の基本的な要素を抽出する。そして、いくつかの実践事例を通して検討した上で、その意義、今後の課題・方向性を考察していく。

なお、ここでいう「子ども」とは、取り上げる実践事例に基づけば、おおむね小・中学生ということになるが、「子どもと大人との参画学習」の検討の段階では、「子ども－大人」を「年少者－年長者」というように、幅広く捉えている。

また、「参画」は、一般的に「単に、用意された活動に加わるだけではなく、その活動の計画・立案段階から活動に加わっていること」という意味で捉えられることが多い。ただし、以下でロジャー・ハートが指摘しているように、その基本は「主体的に自分の行動を選択する」ということである。本稿では、その意味合いを強める意味で「参画」という言葉を使ったものである。従って、ここでの「学習」とは、学校教育、社会教育、児童館などにおける活動、また日常の遊びなど、幅広い場面で共通して考えられるものとして捉えている。

2. 「子どもと大人との参画学習」の要素

(1) ロジャー・ハート (Roger A.Hart) の「子どもの参画」(children's participation)

ロジャー・ハートの「子どもの参画」の理論は、本稿の「子どもと大人との参画学習」を検討していく上で、非常に基本的で重要な点が含まれていると考えられる。彼は、その理論を作り上げていく上で、世界的に多くの実践活動を行っており、また、その実践の中から生み出した「参画」(participation)という言葉について、「人の生命や人間が暮らすコミュニティの生活に影響を与える意思決定を共有するプロセス全般を指す。」(the process of sharing decisions which affect one's life and the life of the community in which one's lives) と説明している。⁽⁵⁾ さらに、ロジャー・ハートの「子どもの参画」の重要なポイントは、以下の三点であると考えられる。⁽⁶⁾

① 何に参画しているか

「何に参画するか」という点について、第一の条件として「自分の人生への参画。自分の生活を主導すること。」としている。その後、家庭・学校・社会への参画と広がっていくものである。単に、家庭・学校・社会などに従属するのではなく、あくまで個々人の意思が基本にあり、そしてそれが尊重されていなければならない。つまり、個人の主体性を基盤にしていることが、その重要な点となっている。

② 「参画」のメリット

「参画」のメリットとして、次の二つがあげられている。第一に、個人が有能で自信に満ちた社会の構成要員に成長することを助けること(個人的側面)。第二に、コミュニティの組織や機能が改善されること(社会的側面)、である。

そして、これらのプロセスに必要なものとして、他者との共同作業、対話、協力、交渉、相互合意、対等な関係におけるコミュニケーションが必要になってくる。そのことによって、子どもと大人との意思疎通が生まれ、お互いがいっそう理解し合えるようになる。たとえば、子どもと大人との関係において難題に直面しても、それをはっきり表現することを通じて気づいていくこと、意識化していくことが大切であるとしている。つまり、「参画」のメリットを生み出すには、子どもと大人のコミュニケーションが必要となるのである。

③ 参画の計画(プロジェクト)の仕方について

どんなプロジェクトでも最良の戦力とかテクニックは存在しない。様々な人間が、様々

な段階において、様々な度合いで、様々なかかわり合いができるようなプロジェクトを企画すべきである。重要な原則は、選択（choice）があることであり、必ずしも、目に見える形で「参画」していなくてもよい。自分で主体的に「プロジェクトに加わらない」、あるいは「リーダーの役割をしない」、という選択も認められるべきである。つまり、そこには主体的な人間の多様な活動に対する許容性がなければならない。

（２）「子どもと大人との参画学習」の要素の抽出

以上の「子どもの参画」の意義の三点は、Paul.Lengrand が提唱した生涯教育の理念の中にも見出せると考えられる。^④ そして、それらを合わせて考えると、「子どもと大人との参画学習」の要素として、次の三点が導き出されるだろう。

① 個人の主体性を尊重し、自己の意思決定を重要視すること。

個人の主体性を尊重することは、子ども、大人にかかわらず、すべての人間関係において、その基本とするべきものである。しかし、特に「教育」の場面においては、「教育的配慮」の名のもとに、無意識的にも、このことが忘れられ、様々な問題を引き起こしてしまうことがある。この「主体性の尊重」という基本的な点を重要視していることは、教育の全体的なあり方を改めて考えさせるものであろう。

② 他者とのコミュニケーションを重視し、必要とすること。

ここでいうコミュニケーションは、子どもと大人のコミュニケーションだけではなく、子ども同士や大人同士のコミュニケーションも含まれている。ただし、中でも、特に、子どもと大人とのかかわりにおいては、単に大人が子どもに知識を教える、という関係ではなく、お互いの共同作業の中で、相互の学び合いが生まれるような協同的なかかわり合い方を含んでいることに、この参画学習の特徴がある。

③ 活動内外における選択の多様性を許容していること。

個々人が自分の活動を選んでいく際の、その選択肢の幅は、多様性と流動性を持ったものでなければならない。それは、個々人が他者との様々なコミュニケーションを経験していくために必要なものである。さらに、その選択の多様性・流動性を、全体として可能、かつ許容するしくみやネットワークが存在しなければならない。

以下、これらの要素がどのような方法で、実践の場を含みこまれているかを検討する。

3. 実践事例

－「環境パートナーシップオフィス」

日米環境交流事業「持続可能性のための教育についての対話」より

環境パートナーシップオフィスは、環境庁が市民・事業者・行政機関の連携による環境活動促進を目的に 1996 年度に立ち上げたプロジェクトチームである。「環境教育」の概念を超えた「持続可能性のための教育」について、事例収集をもとに、そのプログラムやカリキュラム開発をしながら、個々の事業をどう支援できるかの模索を続けている。

(1) 事例1：バーモンド自然科学研究所「未来のための環境学習」

(Environmental Learning for the Future)－PTAを巻き込んだ自然教育⁽⁷⁾

バーモンド州自然科学研究所は、バーモンド州の自然を使って、それを環境教育や環境保全の研究に役立てている非営利団体である。そこで行われている「未来のための環境学習（ELF）」とは、主に小学校の理科の授業の中で、体験を重視した自然学習を行うためのノウハウをPTA（小学生の親たち）にトレーニングするプログラムである。自発的な学びの時間を準備することは教師でも難しいことだが、親たちは2時間程度のトレーニングを4回受けた後、自分の子どものクラスで授業を担当する。ここで、親たちは自然との接し方、自然の仕組み、さらに子どもたちとの接し方や、学ぶということはどういうことか、など多くのことを学ぶことになる。

この活動が注目される点は、「大人も子どもも、ある程度の共通体験と学びを持つ」という点である。親子の共通の体験が、学びを行動につなげるきっかけとなっている。ここでは、「人間が何らかの形で自然環境を壊している」という現状を、子どもたちと共に分かち合い、少しでも改善のための努力を、子どもたちと共に重ねていくという過程において、子どもと大人のコミュニケーションは拡大していくようである。子どもたちの教育活動に多くの大人たちが入り込み、そのプロセスのなかで大人たち自身も学び、変化していつている。

(2) 事例2：こども環境活動支援協会「こども環境活動支援ネットワークシステム」

－子どもの環境活動を支援するまちぐるみのシステム⁽⁸⁾

こども環境活動支援協会は、子どもたちの自主的な環境活動を支援するために、体系的な環境学習の仕組みづくりや、生活・地域に根ざした環境学習プログラムの開発、及びその推進役となる人材育成などを目的とした、西宮市のNPOである。

「こども環境活動支援ネットワークシステム」は、エコ・カードとエコ・スタンプを使った仕組みで、小学生の一人一人にエコ・カードを配布し、環境学習や活動に参加するとエコ・スタンプを押してもらえ、というものである。スタンプを押してもらえる所は、町の文房具店やスーパー、学校、児童館、公民館など、実生活の中である。例えば、文房具店で再生紙のノートを買う、学校で環境や自然の学習をする（教科は問わない）、スーパーで牛乳パックのリサイクルに協力する、児童館・公民館などの事業でエコクイズに参加する、などである。このように、町の至る所にエコロジカル・アクションが潜んでいる。さらに、それをクラスで集めて換金し、環境活動のための資金にもできる。

この仕組みが注目される点は、このエコ・カードがきっかけで、地域の人と子どもたちの間にコミュニケーションが生まれることである。子どもたちが再生紙のノートを買に来ると、他に自分の店でエコ・スタンプにつながる商品はないかと、大人は考えるようになり、さらに、子どもと大人のコミュニケーションの場や機会も拡大していく。大人たちが子どもと接することで、大人たち自らも変わっていくプロセスが見られる。例えば、店の子どもたちに対するイメージが、「悪さ（万引きなど）をするのでは・・・」というマイナスのイメージから、コミュニケーションを通してプラスのイメージに変わっていったという。大人たちが、常に「共に考え」「共に行動する」というスタンスを保ちつづけることが、

活動を継続させていくポイントであると考えられる。

このシステムは、子どもたちが自主的、継続的、総合的に環境活動にかかわることのできるしくみを家庭・地域・学校という全生活領域を土台として確立することを目指している。これまで、行政や学校が単発で行ってきた環境活動や学習が、ともすれば単発的なイベントや個別学習に終始する傾向にあり、継続性や団体間の連携が十分に図られていなかった。この反省にたつて、地域社会の中にネットワークを広げ、子どもたちが全生活領域で起きていることを自分自身で考え、関連付け、体系化していくことを目指している。

ネットワークを作っていくには、文房具店やスーパー、学校などを、一つ一つまわって協力をお願いするなど、その苦労も大変であるが、「環境」という現代的課題を中心に活動が展開していることによって、このシステムがうまく機能しているようである。

4. 「子どもと大人との参画学習」の検討

3. の実践事例から、2. - (2) での「子どもと大人との参画学習」の要素は、次のような具体的な場面で表れている。

(a) 子どもと大人が体験・経験を共有する場がある。

(b) 全体として、子どもと大人が様々な度合いのかかわり合い方、様々な方法のコミュニケーションを行うことのできる場や機会が存在している。そして、それを通して、個々人がお互いにその個性を知り、さらに、それが自己肯定感や自己存在感を感じられることにつながっている。

← ② 他者とのコミュニケーションを重視し、必要とする。

(c) (a) と (b) を通して、個々人の主体性・自主性が生まれる。そして、様々な場や活動において、自分の行動を選択・決定していく。

← ① 個人の主体性を尊重し、自己の意思決定を重要視する。

(d) 最終的に、コミュニティや組織の機能改善につながっていく。

← ③ 活動内外における選択の多様性を許容している。

(a) の「体験・経験の共有」は、必ずしも同じ活動をするということとは限らない。あるいは、同じ活動をして、そこから同じことを学んだり、感じたりするとも限らない。重要なのは、そこから (b) のように子どもと大人のかかわりが生まれ、自分自身や相手を知るきっかけとなっていることである。

(b) については、様々な場所や空間において、これらのかかわりの在り様が、その場の特徴や状況によって意識的・無意識的に選択されているものである。また、一つの活動の中にいても、様々なかかわり方が意識的・無意識的に選択されながら展開されており、その中で子どもも大人も様々な体験・経験をしている。

一方、1. - (2) で前述したように「子どもと大人との参画学習」は、〈子どもと大人の共同活動〉を主とした活動や学習であるが、そのみを強調するものではない。様々なかかわり方が、臨機応変に選択されながら、子どもの主体性・自主性を育てていくために、

子どもの自己決定を最大限尊重し、認めていこうとするものである。

すなわち、ここで子どもと大人の協同的なかわり合い方が特に重要視されるのは、それが子どもの自己決定を、行動として最大限認めている形であるからと考えられる。そのことによって、子どもたちが自己肯定観を持ち、そして個々人の主体性・自主性が生まれることにつながっているのである。このように、「子どもと大人との参画学習」は、上記の（a）～（c）が循環しているものであり、それが結果的に（d）へとたどりつくものである。

また、このようなかわりの在り様は「単に大人から子どもへ知識を教える」というコミュニケーションの薄い教育観を転換し得るものとも考えられる。この点において、今後の生涯学習社会にとって、重要な意義を持つものであるといえるだろう。

5. 今後の方向性・課題

具体的に、どうすれば以上のような学習の多様な場や機会が創出されていくのだろうか。

本稿での実践事例では、結果的に成功している事例だが、そこにいたるまでの過程では、様々な阻害要因が存在していたようである。様々な実践事例を検討してみると、このような「子どもと大人との参画学習」の多様な場や機会を創出していくことを阻んでいるものの一つに、子どもたちに対する教育観の問題があげられる。現代では、学校などの管理的なシステムの中で、子どもを「管理する」ということの要素が、次第に教育の大部分を占めるようになってきた。その結果生み出された教育に対する価値観は、大人から子どもへの、一方向的で相互のコミュニケーションの薄い教育活動として現れてきた傾向にある。

また、管理システムの中で「大人が子どもに教える」ということが行われる時、大人は自分の存在を仕事などの「役割」を通したシステムの中におくことが多い。しかし、特に子どもと協同的にコミュニケーションをしようとする時には、大人は自らの存在価値を、システムの中における権威性を伴った「役割」ではなく、自ら自身の内に求めた状態でいなくてはならない。

従って、最も「子どもと大人との参画学習」が生まれやすい土壌としては、組織としての柔軟性が高い、ボランティア組織やNPO活動などが考えられるだろう。また、活動内容としては、日常生活と密接に結びつき、そこから様々な問題へと広がりを持つ「環境」などが注目される。そのような点を踏まえて、今後は、組織や活動内容に焦点を当てながら、より多くの場や空間で「子どもと大人との参画学習」が生まれ、子どもと大人のかかわりのバランスがとれる方向への模索を続けたい。

【注】

- (1) 主に以下の文献等などにおいて、子どもたちが、自然や他の子どもたち、地域の大人たちとのかかわりを持つ機会が少なくなっている点が指摘されている。

・佐藤初男『心の教育と長期自然体験プログラム』（『教育と情報』№496，平 11）p.10

- ・内田伸子『少子化時代の子どもの育ち』（『季刊 子ども学』第8号，ベネッセ，1995）
p.42
- ・社会教育審議会答申「急激な社会構造の変化に対処する社会教育の在り方について」
1971
- (2) 「子ども期の喪失」については、主に以下の文献を参考にした。
 - ・斎藤次郎『「子ども」の消滅』雲母書房，1998
 - ・ニール・ポストマン（小柴一 訳）『子どもはもういない』新樹社，1995
 - ・マリー・ウィン（平賀悦子 訳）『子ども時代を失った子どもたち』サイマル出版会，
1984
- (3) 以下で著者が行った児童館や冒険遊び場での実践事例調査より導き出したものである。
 - ・五十嵐牧子『子どもの主体性を育成する活動とコミュニティーシステム ー子どもと
大人のかかわりの視点から』（文教大学大学院人間科学研究科生涯学習学専攻修士論文，
2000）
- (4) 主に以下の文献を参考にした。
 - ・ポール・ラングラン（波多野完治 訳）『生涯教育入門』（財）全日本社会教育連合会，
1971
 - ・ポール・ラングラン（波多野完治 訳）『生涯教育入門（第二部）』（財）全日本社会教育
連合会，1984
- (5) Roger A.Hart, *Children's Participation : From Tokenism to Citizenship* . Innocenti Essays No.4, UNISEF International Development Center , Florence.
1992, p. 5
- (6) 主に以下の文献を参考にした。
 - ・Roger A.Hart, *Children's Participation : From Tokenism to Citizenship* . Innocenti
Essays No.4, UNISEF International Development Center . Florence, 1992
 - ・Roger A.Hart, *Children's Participation : The theory and practice of involving
young citizens in community development and environmental care*. UNISEF
& Earthscan Publications Ltd. 1997
- (7) 以下の文献において、環境パートナーシップオフィスの活動事例が紹介されている。
 - ・村上千里、川村研二『環境教育の日米交流が始まった。』（『BIO - City』No.18, 2000）
pp.84 - 86
- (8) 以下の文献及びスタッフからのインタビューを参考にした。
 - ・同上，p.86
 - ・こども環境活動支援協会（LEAF）ホームページ
(<http://www2.ocn.ne.jp/~leaf-j/indexsub.html>)
 - ・『「持続可能な社会のための教育」を求めて～これからの環境教育～』（『日米環境教育
交流事業「持続可能性のための教育についての対話」報告書』 環境パートナーシッ
プオフィス・（財）日本環境財団，1999